

南宋文人の文学活動と出版：王十朋と陸游をめぐって

甲斐, 雄一

<https://hdl.handle.net/2324/1440978>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文審査の結果の要旨

図書の出版は北宋(960~1127)時に国家事業として推進され、南宋(1127~1279)では更に地方や個人の出版が普及する。従来の研究は、南宋文学を唐~北宋~元代文学史の一部として総体的に論じて一定の蓄積を有するが、出版活動に注目し、南宋に特化した個別研究はまだ不十分である。

本論文は、南宋の文人王十朋(1112~71)と陸游(1125~1210)について、両文人の詩文集を丹念に読解し、その出版や流通、文人交流や読者評価等について具体的に考察したものである。

本論は序論と結論を含み、「状元王十朋の文学活動と南宋出版業」について論じた上篇三章、「陸游の四川体験と『劔南詩稿』の刊刻」について論じた下篇三章の計六章から構成される。

第一章では、学界で初めて王十朋の『会稽三賦』を本格的に取り上げ、この作品に注釈を加えた中間層文人(詩文の能力を有しつつ、南宋への仕官意識を持たない文人)の史跡について考察した。

第二章では、書名のみ伝わる唱和詩集『楚東唱酬集』の復元を試み、王十朋を中心とした参加者やその時期、政治主張の特性等について分析した。この研究も本論文が最初の試みである。

第三章では、『王状元集百家注東坡先生詩』の注釈者「百家」(実は96名)のうち、王十朋と関係を有する注釈者について克明に調査した。「王状元(十朋)」ブランドには、状元・対金主戦派・泉州知事という三層の評価が重なるとの分析結果は新鮮で納得がゆく。

第四章は、陸游と四川文士との放埒な中に憂国心溢れる交流の実態を述べる。論文は、陸游の「放翁」『劔南詩稿』(劔南は四川の別名)の命名が彼の四川体験に由来することを指摘する。

第五章では、陸游が孝宗の厚遇によって嚴州知事を拝命したこと、友人達は陸游を「四川を踏破した詩人」として評価し、やがて嚴州での『劔南詩稿』刊刻に繋がることを述べる。

続く第六章では、同時代人の陸游評価に、彼が唐の大詩人杜甫の四川足跡をなぞった点が加味されていることを論述した。また陸游の四川赴任は左遷というマイナス評価ではなく、詩人としての評価を得る実地体験としてプラス評価されていたことを指摘する。

早く南宋時代に刊刻された王十朋や陸游の詩文集は、近年校注本が刊行されて研究環境が整った。本論文の提出者はこれらの資料を子細に読破し、出版という観点から、これまで注目されなかった作品や唱和詩集、詩集の注釈者、文人交流等の情報を抽出して論述した。今後更に広範な研究の積み重ねが待たれるが、本論文は、従来の一般的総体的な南宋文学史研究を、王十朋や陸游研究を通して、より具体的実証的に深化させたものとして評価できる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を有することを認める。